

歴史から現在をとらえて

モダニズム建築は何を求めたのか

神奈川大学教授・建築史研究者
松隈 洋

今年2025年は、敗戦後80年、昭和100年、阪神・淡路大震災から30年という節目の年となる。建築界に目を転ずれば、前川國男(1905～86年)の生誕120年、ル・コルビュジエ(1887～1965年)の没後60年にもあたる。一方で、昨年2024年は、ル・コルビュジエと直接会話を交わし、自著の巻頭に「モダニズム」は「私にとって、建築家としての設計活動の原点であり、基盤でもある^(注1)」と書き留めた槇文彦が6月6日に95歳で、1962年に准教授の槇が教えていた留学先のハーバード大学デザイン大学院(GSD)の製図室で出会い、兄のように慕って60年余りの交友を重ねた谷口吉生が12月16日に87歳で相継いで亡くなり、時代の移り変わりを実感させる年となった。ちなみに、槇と谷口がハーバード大学で学んだのは、草創期のル・コルビュジエのアトリエで、「第1エキップ(作業班)^(注2)」と彼が呼んだ最初のチームの同僚として前川國男と出会い、長く親交のあったスペイン出身の建築家ホセ・ルイ・セルト(1902～83年)[写真1]である。彼は、1939年にGSDの前任者でドイツの造形学校バウハウスの創設者だったヴァルター・グロピウス(1883～1969年)に招かれて渡米し、槇が入学した1953年からアーバン・デザインを教えていた。また、セルトは、2年前の1951

年に、前川と丹下健三、吉阪隆正が参加してロンドンで開催された国際建築家会議(CIAM)第8回大会[写真2]で、「都市のコア」をテーマに議長を務め、現代都市が見失っている人びとの拠りどころとなる広場的な公共空間の必要性を訴えていた。GSDでは、他にも、ル・コルビュジエやグロピウスと共にCIAMの創設メンバーだった建築史家のジークフリート・ギーディオン(1888～1968年)が教えており、谷口は彼の講義を受講し、グロピウスの事務所にもアルバイトで通っていた^(注3)という。そうした意味からも、槇文彦と谷口吉生は、文字通り、戦後のアメリカでモダニズム建築の先駆者たちに直接学び、直系の正統派として世界的に活躍した最後の日本人建築家であった。二人の死は、モダニズム建築の日本における生きられた歴史の終焉を意味する。と同時に、モダニズム建築は何を求めたのか、その再検証が必要な時代となったと言えるだろう。

「作品」と「非作品」の狭間で

さて、そのような中で、2024年、彼らに続く現役世代で、ル・コルビュジエに今も心を寄せる伊東豊雄(1941



[写真1] 前川國男とホセ・ルイ・セルト(右端)、ル・コルビュジエのアトリエにて、1929年頃(前川建築設計事務所蔵)



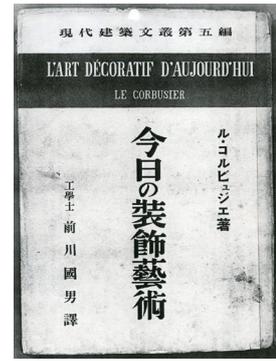
[写真2] 第8回国際建築家会議で再会したル・コルビュジエと前川國男、1951年7月(前川建築設計事務所蔵)



【写真3】ル・コルビュジェ「国立西洋美術館」1959年（1999年撮影／筆者）



【写真4】『建築をめざして』原本
Le Corbusier, *Vers une architecture*,
Nouvelle éd. revue et augmentée,
G. Crès, Collection de "L'Esprit
nouveau", Paris, 1924.
(京都工芸繊維大学図書館所蔵)



【写真5】ル・コルビュジェ著、前川國男訳
『今日の裝飾芸術』構成社書房、1930年

年～)は、2023年秋に竣工した「茨木市文化・子育て複合施設おにクル」の掲載誌に寄せた文章の中で、次のように書き留めていた。

「「みんなの家」は、「作品」としての建築と、「非作品」としての建築について考える契機となりました。つまり大震災後の緊急事態において、私が長年こだわってきた「作品」としての建築はどのような意味を持つのだろうかという問題です。突きつめれば「建築を一体誰のために、何のためにつくるのか」という問題です。これは決して私だけではなく、大方の建築家に突きつけられる問題^(注4)であるはずです。」

「みんなの家」とは、注にあるように、「2011年東日本大震災の後、仮設住宅団地の中などを中心に被災者が話し合いや食事をするためのコミュニティのための家」として、伊東が発案者となって計画された小さな公共施設であり、反響を呼んだ。三陸地方に16棟、熊本県内に126棟が建てられたという。だが、この文章からは、建築家という職能に対する自省的な思いが読み取れる。それは、自然災害により住まいを失った多くの被災者が身を寄せた仮設住宅の間に、自らの「作品」としてではなく、匿名性を持つ「非作品」をつくる際に、否応なく気づかされたことなのか、伊東は、続けて、次のように問いかけたのだ。

「多くの建築家は、メディアのために、言い換えれば建築家のために建築をつくっている、と言えるのではないのでしょうか。」

伊東がこう問いかけずにいられなかった背景に何があるのだろうか。また、「作品」と「非作品」という分けを

どう捉えたら良いのか。顕在化したのは、この文章の表題の「誰のために、何のために建築をつくるのか」という問いに含まれていること、すなわち、建築家という職能が持つ社会的な使命に対する自信の揺らぎであり、建築が社会的な信頼を失っている状況への危惧なのだと思う。そのことを再考する糸口はしたら見つけれられるのか。ここでは、歴史の針を巻き戻して、ル・コルビュジェらが切り拓いた20世紀のモダニズム建築の始まりにあったものとは何かについて考えてみたい。

『建築をめざして』の結語に込められていたこと

2016年7月17日、ユネスコは、ル・コルビュジェが唯一日本で手がけた東京上野の国立西洋美術館(1959年) [写真3] を含む世界7カ国に点在する17件を、一括して世界文化遺産に登録することを決議した。この発表によって、彼の名と西洋美術館への関心が高まったに違いない。けれども、注目したいのは、その根拠とされた「近代建築運動(Modern Movement)への顕著な貢献をした」という文言だ。評価を受けたのは、建築の「作品」的な価値ではなく、近代建築「運動」への貢献であり、そこにこそ、モダニズム建築が切り拓いた歴史的な意味が含意されているのだと思う。そして、彼が求めたものをより正確に知ろうとするとき、1923年、ル・コルビュジェが、「住宅は住むための機械である」という有名なメッセージを収録した初めての著書『建築をめざして』 [写真4] の結語に記した、「建築か、革命かである。革命は避けられる^(注5)」という言葉に着目する必要がある。

ル・コルビュジェは、なぜこのような謎めいた結語を書き留めたのか。そこには、建築を独学で学び、建築家を志した彼の初心とも言える切実な思いがあったに違いない。スイスに生まれ、30歳を迎える1917年にパリに

出て、さまざまな仕事で食いつないでいた彼は、同年に起きたロシア革命や、史上初の総力戦となった第一次世界大戦(1914～19年)を目撃する。目の前では戦争や都市への人口集中による大量の住宅不足が起きて貧富の差が広がり、人々は劣悪な生活環境に苦しんでいた。そんな時代に、彼は、血を流すことが避けられない革命や戦争ではなく、建築による社会変革を志し、この著書のタイトルどおり、建築をめざそうとしたのだ。また、だからこそ、第一次大戦下の1914年、ベルギーとフランス北部にまたがるフランドル地方の住宅不足の現状を前に、「ドミノ」と呼んだ建築の工業化による「自由な平面」と「自由な立面」が可能な鉄筋コンクリート構造による概念図を考案したのである。1926年、そんなル・コルビュジエの著書に触れて強い影響を受けた前川國男は、後年、彼に学びたいと思った動機について、次のように振り返っている。

「彼の著書は建築の設計とはどうやってやるものか五里霧中で迷っていた学生の私にとって文字通り闇夜の灯であった。

『…青年達にとって大都会はその扉にとぎされて、人はそのなかにフォークの響きを耳にしながらも空しく飢に死なねばならぬ沙漠であった…』

『今日の装飾芸術』[写真5]の巻末に誌されたル・コルビュジエ半生の「告白」を諳んじる程読み返した私はついに矢も盾もたまらなくなって1928年3月31日卒業式の夜、東京を発ってシベリヤの荒野をパリにはしった。^(注6)

この回想からも、ル・コルビュジエが見つめていたパリの街の姿が浮かび上がってくる。そして、前川は、彼のアトリエで、最小限住宅案の作成を担当することになる。そこには、形骸化し、劣悪な生活環境に対応できなくなった旧来の様式建築に代わり、量産化と工業化によって簡素ながらも機能的で快適な住まいや建築を実現し、何よりも人びとの日常的な生活環境を再編成しようとする共通の目標があった。

長い建築の歴史の蓄積の中からエッセンスを発見する

さらに、ル・コルビュジエが1929年に語った次の言葉も、彼の建築思想と方法を理解する上で、大きな手がかりを与えてくれる。

「人は私を革命家と決め付けます。ここで告白いたしますが、私は今までに唯一の師しか持ったことがないのです。過去という師です。そして唯一の教育しか受けたことがありません。過去から学び取るということです。^(注7)

今でも過去をすべて否定してまったく新しい建築を目指した「革命家」と言われる彼は、生前からそれを強く否定していた。また、独学で学んだからこそ、長い建築の歴史の蓄積の中から、変わることにないエッセンスを引き出し、それを明晰な形で再編成する方法論を発見できたのだ。しかも、彼が見ていたのは、モニュメンタルな建築ではなく、無名の民家や集落であったことが、1955年11月の来日時に、ル・コルビュジエに同行した吉阪隆正が書き留めた次の文章からも読み取れる。

「彼には有名なものであるとか、皆がよいとしているとかいうことは一向に念頭にない。現代に生きているもの、将来も皆がその中で生活できるもの、そういうものであれば、乞食小屋であろうと、路傍の草であろうと一生懸命に拾って歩く。(…)『私がほんとうに建築のことを知ったのは、アクロポリスに於てではなく、あの周辺にある名もない民家を尋ね歩いたときである』という彼の言は、如何にも彼らしい。^(注8)

そして、ル・コルビュジエがモダニズム建築によって実現させようとした「最終目的」は、1935年、ニューヨーク近代美術館に招かれて初めて訪れたアメリカで語ったように、「単なる有用性を越えること」であり、「機械文明に生きる人間に心の健康と喜びを与えること」にあつた。^(注9) また、前川が、1969年に記した次の言葉からも、ル・コルビュジエの掲げた近代建築の使命を引き継ごうとする意志を読み取ることができる。

「近代建築の本道は、建築家の個性的な精神によって検証されたところの、ひとつの「原型」としての建築を創造することであつたはずなんです。つまり、近代社会が生み出すマス状況(人口や、人間の活動、生産物などが都市に集中し、大量化するような社会の状況)に対応しなければならないという、社会的な関心が底辺にあつたわけです。「原型」であればこそ、近代建築は当然、社会性と普遍妥当性をもって

いたはずなんです。(注10)」

こう指摘された、「社会性」と「普遍妥当性」を持ち、誰もが共有して発展させることのできる「原型」をつくり出すことに近代建築の「本道」があるとの認識は、どこで見失われてしまったのか。モダニズム建築の出発点に共有されていたものは何だったのだろう。

モダニズム建築の初心と掲げた共通の目標とは何か

私見では、それは、工業化社会において、人々の暮らしを支える「生活空間」をどう組み立て直すのか、という問題設定であり、背景には、産業革命以降に顕在化した、近代都市が抱え込んだ生活環境の劣悪化や戦争や自然災害による住宅不足という深刻な社会問題があった。それに対して、急速に発展しつつあった建設技術を推進力に、建築を根本から組み立て直そうとする共通の意志が育まれていく。この時、彼らが手がかりにしたのが、近代以前にそれぞれの気候風土の中で培われてきた土着的な無名の建築(ヴァナキュラー)が持つ簡素な造形だった。モダニズム建築「運動」の核心にあったのは、建築とは人間にとってどのような存在なのか、という根源的な問いであり、住まいや建築が人の生活を庇護し、命をつなぐためにあるという原点に立ち返ろうとする思想運動だったのだと思う。そう考えるとき、現代建築に求められるのは、人びとのよりどころとなる身近な場所の再構築であり、「公共性」を育む「共有地」の創造へとつながる日常的な生活空間への眼差しではないか。それは、政治学者バーバーが指摘する次のような目標へ向かうものでなければならないだろう。

「市民社会には〈私たち〉の場所があるべきである。それは、真に私たちのための場所であり、私たちが共有しているもののためであり、共有の中で私たちが育っていく場所である。その場所は民主的でなければならない。(注11)」

先ごろ新聞で報道されたが、「子どもがひとりでも安心して行ける無料または低額の食堂」である子ども食堂が、全国で1万カ所を超えたという。このことに象徴されるように、私たちの目の前には、自然災害や格差拡大により、安心して暮らす住まいや、抛りどころとなる場所を持たずに苦しんでいる大勢の人びとがいる。その一方

で、巨額を投じた大阪万博が開催され、明治神宮外苑に象徴されるように、巨大な都市開発は止まらず、全国各地で建築祭と呼ばれる建築ツアーが盛んに行われている。こうした中で、建築家は自らの「作品」づくりに集中し、建築史研究者は「建築祭」の解説者としてタレント化しつつある。このような現実を直視しない建築界が、どうして社会的な信頼を得ることができようか。

1937年、ル・コルビュジエが、「建築とは？ 身を護る場を作ることです。誰のために？ 人間のためにです。」「衰弱し、金銭によって腐敗させられたわれわれの社会に必要なのは、各人の心の底に+（プラス）を書き入れることだ。それで十分であり、それがすべてだ。それは希望である。(注13)」と呼びかけ、太平洋戦争下の1942年、前川國男が、「われらの造形理念出生の揺籃はわれらをとるかこむ全環境なのである。バラックをつくる人はバラックをつくりながら、工場をつくる人は工場をつくりながら、ただ誠実に全環境に目を注げ」と問いかけたように、モダニズム建築の出発点にあった、生活環境に対する責任と誇りを持つ、建築家という職能への自覚が求められている。

〈注〉

- 1: 横文彦『記憶の形象』ちくま学芸文庫、1997年、p.32
- 2: 前川國男「第1巻によせて」『ル・コルビュジエ全作品集』第1巻、A.D.A. EDITA Tokyo Co.,Ltd.、1979年
- 3: 谷口吉生『私の履歴書』淡交社、2019年、「谷口吉生 インタビュー： 不断の交流と友情」『建築と都市a+u』2024年10月臨時増刊『横文彦 言葉と場所』
- 4: 伊東豊雄「誰のために、何のために建築をつくるのか」『新建築』2024年7月号
- 5: ル・コルビュジエ著、吉阪隆正訳『建築をめざして』鹿島出版会SD選書、1967年
- 6: 前川國男「まえがき」ル・コルビュジエ著、生田勉・樋口清訳『伽藍が白かったとき』岩波書店、1957年／岩波文庫、2007年
- 7: ル・コルビュジエ著、井田安弘・芝優子訳『プレジジョン(上)』鹿島出版会SD選書、1984年、pp.62-63
- 8: 吉阪隆正「ル・コルビュジエ来日す」『建築雑誌』1955年12月号
- 9: 注6に同じ。岩波文庫、p.73
- 10: 前川國男「ビルの建設・都市計画—建築家—」、松田道雄編『君たちを活かす職業』筑摩書房、1969年
- 11: ベンジャミン・R・バーバー著、山口晃訳『〈私たち〉の場所—消費社会から市民社会をとりもどす』慶應義塾大学出版会、2007年
- 12: 「子ども食堂 育まれ1万カ所」『朝日新聞』2024年12月12日、湯浅誠「つながり続ける こども食堂」中央公論新社、2021年
- 13: 注6に同じ。岩波文庫、p.302、pp.322-323
- 14: 前川國男「覚え書」『建築雑誌』1942年12月号